

コラム第5回「複雑な社会の中で、学び、働く」

<はじめに>

松江未来学園では、アルバイトに励む生徒が年々増えているように感じています。いま現在でアルバイト経験がある生徒は、私の知る範囲で30名中14名です。このように経済活動の一步を踏み出す高校生と関わる中でいろいろと感ずることがあります。そこで今回のコラムでは、変化が激しく、複雑化する現代社会の中、「どう学び、どう働くか」を考えたいと思います。

関東を中心として展開する学習塾「花まる学習会」。この学習塾では、将来「メシが食える大人」を育てると銘打ち、数学的思考力、読書と作文を中心とした国語力、野外体験を学びの柱としています。この「メシが食える大人」というコンセプトと学習法に、私は魅力を感じています。それは、学ぶ内容、学ぶ意味、将来の目標イメージが明確だからです。分かりやすく、多くの学生の学習意欲を高めやすいと感じています。

<求められる力、広がる格差>

わが子が自立し、生活に困らないようになることを望む親は多いのではないのでしょうか。そのために「安定した職」につき、生きるに事欠かない「収入」を得られる社会的なポジションを求める親心があります。では、こうした安定した地位を得るために、何が必要なのでしょうか。

時代をさかのぼってみると、江戸時代から明治・大正・昭和初期のように「生まれ」や「身分」で地位が決定する時代がありました。その後、社会が成長期に入ると「能力や努力（偏差値や学歴含む）」で序列を変えられる時代が到来します。私が生きてきた昭和とはそのような時代だったように記憶しています。そして平成から令和は「コミュニケーション力や問題解決力」といった、変化が激しい社会を生きる力が問われる時代となりました。

ですが、このコミュニケーション力や問題解決力といった力は、どうしたら身につくのか今ひとつ解りにくいところがあります。ひと昔前がいいとはいいませんが、「勉強する→いい学校に入る→いい就職先に入る→給与が高く生活が安定する」といった分かりやすい物語と比べると、何をしたらどう報酬を得られるのかがみえてきません。社会学者の荻谷（2001）は、このように「外側にあるインセンティブ（報酬）

がみえにくくなった分、全体としての学習意欲の低下が進行している」と述べています。ところが、「意欲の減退は、すべての子どもたちに同じように生じているわけではない」とも述べています。ある特定の社会階層の子どもの中に生じているというのです。

<学ばないことで自信がつく!？>

学業や仕事について努力して成果を出すといった「業績主義的価値から離脱することが、社会階層の相対的に低い生徒たちにとっては<自信>を高める」という研究結果が示されています(荻谷 2001)。つまり、頑張らないことで、自信が保たれる仕組みをつくりだしてしまうというのです。具体的には、「あくせく勉強してよい学校やよい会社に入っても将来の生活に大した違いはない」と、信じ込み学ばないことを正当化して、競争を回避することで、「自分は人よりすぐれている」という自己意識が守られるのです。その結果、学習時間・学習意欲が低下し、ひいては所得や就業機会の格差につながります。

私は松江未来学園において、『上記のような「勉強しないことを正当化する誘惑」から生徒たちを守るためにはどうしたらいいか』『変化が激しく、複雑なシステムをもち、不確実な現代社会を生きていくために必要なことは何か』『大人としてわが子に、生徒たちに、何を伝えられるのか』と自問自答する日々です。少なくとも、将来「メシが食える大人」となるよう、勉強や運動や行事など「いま目の前にあることに一生懸命取り組み」、こうした活動を介して「人との関係を築き、深めていける」。そんな未来に繋がる学園であるといいなと日々願っています。

野中浩一 拝